

英語と日本語の物語の進行と 時間の認知に対する一考察

An analysis on the cognition of temporal progression of narratives
in English and Japanese

藤原正道

英語コミュニケーション学科准教授

抄録：

本論では認知意味論の視点から、日本語と英語の物語の時間の進行について分析を行っている。空間の変化が、時間の進行と関係していること、そして物語文中の過去完了と歴史的現在を分析することによって、日本語と英語の時間のとらえ方の違いを明らかにしている。

Summary：

My goal in this paper is to reanalyze the temporal progress in English and Japanese narratives through the framework of cognitive semantics. I argue the relationship between space and time and foreground and background.

Furthermore the difference of tense system and temporal progress between English and Japanese is clarified through the analysis of past perfect and historical present in English and Japanese.

キーワード：認知、時間の進行、物語、過去完了、歴史的現在

Key words：cognition, temporal progression, narrative, past perfect, historical present

1. はじめに

この論文の目的は、認知意味論の視点から物語（narrative）の時間の進行について再考することにある。

物語の時間は、結末に向かって進むが、現実世界のように常に順序立てて進むわけではない。過去へ戻ったりもできるし、早く進んだり、ゆっくり進んだり、または伸びたり、縮んだり、さらには時間が止まったような印象さえ与える。

物語は、現実の時間に従っているのではなく、語り手の認識に従って進んでいく。物語の進行

は、話し手の意識の進み具合だと言える。

本論では、話し手の認識に基づいた時間感覚を基準に、物語の時間の流れを分析する。客観的な時間の流れではなく、人間の頭の中で組み立てられた物語の中に流れる時間が、分析対象である。

英語と日本語の物語を取り上げ、空間・場面の移動と時間の進行、過去完了と歴史的現在を用いた物語を分析することにより、両言語の物語の時間構造の違いも明らかにする。英語が絶対時制なのに対して、日本語は相対時制を持つことを指摘する。

また、小説の様々な技法による影響を可能な限り少なくする意図から、本論の分析対象は、語り手が登場人物で、一人称の物語に限定する。

2. 認知意味論と物語の時間の進行

認知意味論は、人間の日々の経験によって得た認識が、言語表現の中に現れるという立場を基本に置いている¹。言語表現に表れる人間の認識は、自己を中心とした主観的なもので、客観的ではない²。自己の経験の積み重ねが、言語表現に現れてくる³。

そうすると、物語の時間が常に進んでいるように感じるのは、現実世界の経験から構築された認識で、結論に向かって時間が進むというのが、物語に対する人間の認識の原則である。さらに、左から右へと時間が進むという、2次元で時間の進行を捉えているのも、人間の時間に対する一般的な認識といえる。

しかしながら、物語の語り手は事態が生じた時間 (Event Time: ET) の順番にそれらを語るだけでなく、昔の記憶を思い出し、それらを折りまげながら物語を語る。一方、過去へと思いをさせている間にも、現実の時間は常に前に進んでいる。そのような経験から、物語の事態は現実の時間に沿って順番に並んでいるわけではなく、語り手は物語の時間進行の基準点 (Reference Time: RT) とともに前進しながら事態を認識し、それを表している⁴。

常に未来の結末に向けて進んでいるはずの RT が、前進しないように感じるのは、該当する事態が始まる開始点、そして事態が終わる終了点の両方が語り手に認識されない場合で、動詞に含意される意味を中心に、藤原 (2007a/b) などが示している (1) の要素が、時間の進行 (=RT の進行) に関係している。

- (1) a 動詞の語彙アスペクト (動作・状態)
b 動詞とその項 (動作主・被動者) の関係

¹ 本論で言う人間は、英語と日本語を母国語として使用する人、または各言語、両言語に対する母国語並みの直感を有する人を示す。

² 次の例からわかるように、英語も日本語も未だ天動説を採っている。

- (i) a 太陽が東から昇る。
b The sun rises in the east.

³ 恋愛で苦勞した経験からしか、以下のような表現は生まれないと、私は信じる。

- (ii) a 彼女が進軍してきたので、彼は逃亡した。(=彼女が言い寄ってきたので、彼は逃げ出した。)
b He fled from her advances.

⁴ Fujiwara (1995)、藤原 (2004, 2007a/b) 参照。

- c 時制 (過去「タ」・非過去「ル」)
- d 相 (*have-en / be-ing*、「テイル」)
- e 動作主の意志性 (意志的・非意志的)
- f 肯定 (肯定・否定)
- g 叙法 (現実・非現実)
- i 時の副詞
- j 時の接続詞

そして日本語には完了相を表す特別な文法形式はなく、工藤 (1995) が述べているように「タ」や「ル」には時制の他に、事態の完了の意味も含まれている。

それでは、次の例をみてみよう。

- (2) a ... I edged the nose inside the jamb overlap and turned it so that it put pressure on the lock tongue. It was a spring type and popped right back. *I was in*. I closed the door behind me. ...

(*Poodle Springs*: 86)

- b ... I put my shoulder against the frame and the flat of my hand against the door and pushed in both directions at once and *I was in*.

(*Poodle Springs*: 146)

ここで注目すべきは、〈*I was in*〉である。この文単独では、*be* 動詞に含意される状態の意味から、問題の事態の開始点も終了点も認識されず、物語の時間は進行しない。しかし、(2a) (2b) ともに〈*I was in*〉には、「部屋の中に入った」という部屋の外から中へ移動したという解釈が成り立ち、開始点、終了点ともに明らかになる。よって、物語の時間は進行している。この例は、上記の (1) だけでは、分析できないことになる。

それではどう分析すべきか？ 我々は、空間の移動には時間が掛かるという認識を持っていることを考慮してみよう。そして我々は、触ることもできず、目に見えない時間を物理的に認識できる空間のメタファーを用いて表現する。

次の (3) と (4) の例を見てみよう。

- (3) a I woke up *at* 5 a.m.
 b I was born *in* 1965.
- (4) a 会議のあいだ、別のことを考えていた。
 b その件は妻と相談した上で、お返事いたします。

(3) では、〈*at*〉や〈*in*〉という元々空間を表す前置詞が、時間を表している。モノとして物理的に捉えられず、目にも見えない時間を空間という人間が認識可能な別のモノによって、認識可能なモノとして捉え直している。

さらに、(4)の日本語の例でも、同じ認知が働いている。会議が行われていた時間をモノとモノとの空間つまり、〈あいだ〉で表現したり、相談の結果という事態の完了を示す時間を空間表現の〈上〉を使って表している。

このように時間と空間は、人間の認知能力上密接に関係している。したがって、物語中の空間の移動は、時間の進行に関係しているといっても問題はないようである⁵。

次に前景・後景 (foreground・background) と、物語の時間の進行について再考する。Ehrlich (1987/1990) などの先行研究では、物語の時間の進行の分析に対して前景・後景の概念が用いられてきた。物語の中心的、重要な構成部分が前景であり、その他の背景的部分は、後景となる。前景が物語の時間 (=RT) を前に進め、後景は RT を進めず、前文と同時の RT を示すとされてきた。

しかしながら、物語の構成は時間だけでなく、因果性、つまり事態が生じた原因・理由も重要な要素である。ある事態を引き起こした原因となる事態が、物語の時間の進行に関係していない場合も多く、原因となる事態が、物語の最後に明かされる場合も多い。もちろん、その原因となる事態は、物語の構成上重要な前景である。次の (5) を見てみよう。

(5) 山頂に着いた。お腹が痛かったので、お弁当を食べなかった。

時間の流れだけを考えると、(5)の〈山頂に着いた〉と〈お弁当を食べなかった〉という2つの事態が物語の時間を進めている。〈お腹が痛かった〉は因果性を構成する部分で、物語の時間の進行とはほとんど関係ない。しかしながら、〈お弁当を食べなかった〉ことの理由となる事態は、物語構成上、重要な部分であり、前景といえる⁶。したがって、前景・後景と物語の時間の進行の構造が全く同じというわけではない。

以上の仮定を元にして、次章では日本語と英語の物語文の過去完了と歴史的現在を分析していく。

3. 過去完了と歴史的現在から見た英語と日本語の物語の時間の進行

3. 1. 過去完了

物語は一般的に過去形で表現されるので、さらに前の事態を表す場合、英語では過去完了形を用いることになる。次の例を分析してみよう。

(6) *I had been urban-renewed right out of my office and had to move uptown. My new place was on the second floor of a two-story round turret that stuck out over the corner of Mass Ave and Boylston Street above a cigar store. The previous tenant had been a fortuneteller and I was standing in the*

⁵ 但し、前文に示されている場所との対比関係によって、空間の移動が行われていることが認識されなければ、時間の進行との関連は認められない。

⁶ (5)の事態の後、腹痛が原因となり、その後の大事件に繋がる場合も考えられる。

window scraping her patchy gilt lettering off the pane with a razor blade when I saw him. ...

(*Promised Land* : 9)

(6) は物語の途中ではなく、全くの冒頭の部分に過去完了形〈I had been urban-renewed...〉が使われている。時間を表す副詞も存在していないので、ここでの時間構造は過去時制によって、発話時 (Speech Time: ST) より過去に RT が置かれ、完了相によって、その RT よりさらに過去に ET が置かれ、次の (6') のような時間構造になる。

(6') —————> 物語中の時間の流れ
ET — RT — ST : 〈I had been urban-renewed...〉

同じ物語の日本語訳 (6'') と比較してみよう。

(6'') 都市再開発で、オフィスを市のやや北寄りの区域に移さなければならなくなった。新しいオフィスは、マサチューセッツ大通りとボイルストン通りの角に突っ立っている二階建ての丸い塔のような建物の二階にあって、一階は煙草屋である。前の住人は女占い師で、彼女が看板がわりに窓に貼りつけたつぎはぎの金文字をかみそりの刃で削り取っているとき、その男の姿に気がついた。
(『約束の地』: 5)

物語文中の時間の構造は現実の会話と異なり、ST があまり意識されず、物語中の RT を基準にして対象の ET との前後関係から、時間を解釈することは可能である。

しかし、(6) の場合、「had + 過去分詞」という文法形式のみで、ET が過去 (= RT) よりさらに前であることを表すことが可能である。(6') のように時制によって、ST と RT の時間関係も明らかになるので、物語の冒頭から過去完了形を用いることのできる英語は、ST が常に意識されている。

一方、日本語は英語の過去完了形のような文法形式を持たず、単純過去形との区別なく、「タ」形で表わされる。「タ」には完了相の含意があり、ET は RT より前に配置される。英語の過去時制のように、ST と RT の時間関係を構築するのではなく、日本語の「タ」には完了相の RT と ET との関係が含まれ、英語とは異なる。

さらに、(6'') で「オフィスを移した」ことが、次に述べられている新しいオフィスについての説明より以前に起こった事態だと解釈可能なのは、〈新しい〉や〈前の〉などの表現が前後の文との対比で、対象の事態が RT より前か後かを明確にするからである。特に〈前の〉は空間を表す語句であり、ここでも空間の認知が、時間の進行と結びついている。

さらに、次の例もみてみよう。

(7) 放課後、第二体育館に向かった。

第二体育館は剣道部の他にも、卓球部、新体操部、バトン部が使っているの、(中略) …
果たしてあんな剣道部で、サンカクを手に入れることができるのだろうかと思った。

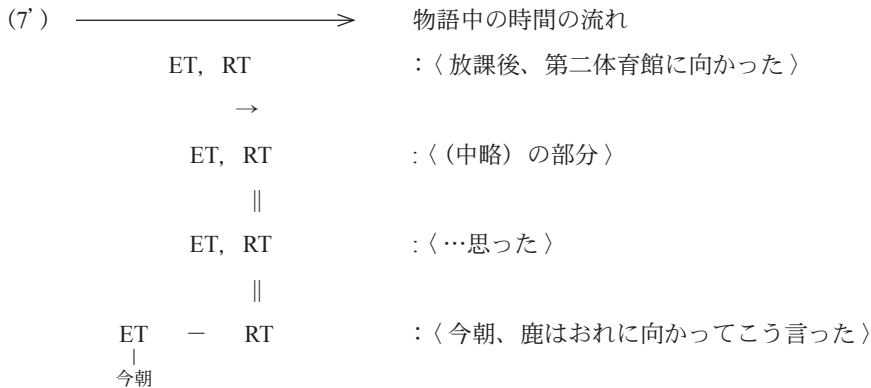
今朝、鹿はおれに向かってこう言った。

先生、サンカクを手に入れないと、この国は滅ぶよーと。

(『鹿男あをによし』: 189-191)

(7) では、〈放課後体育館へ向かった〉に内在する RT を基準に、物語の主軸となる時間が構築され、事態の ET は順番に並べられている。しかし、時の副詞〈今朝〉によって、物語の主軸の時間ではなく、〈…思った〉より以前のことを示している。

以上の時間構造は、以下の (7') のようになる。「||」は同時を、「→」は RT が前進していることを表す。



それでは、時の副詞という具体的な時間が、明記されない場合はどうなるであろうか。次の例を見てみよう。

(8) 一つの問題が解決して、非常に心が晴れ晴れしている。飛火野の空が大きいように、俺の心にも久しぶりに雲間から陽が射している。おれは缶コーヒーの蓋を開け、さっそく次の問題に取りかかることにした。

実は奈良健康ランドからの帰り道の車中、おれはリチャードから剣道部の顧問になってくれないかと急に話を持ちかけられていた。

リチャードの話はこうである。… (中略)

缶コーヒーをぐいと飲み干した。飛火野の空を、雀の群れが忙しげに横切っていく。…

(『鹿男あをによし』: 101-102)

この例では、〈…帰り道の車中〉という空間を示す副詞句が前文との場面の対比によって、前文との時間の対比を示すと推測できる⁷。

〈帰り道の車中〉は、(8)の例よりさらに前の部分にもあった場面なので、その関連性から、〈…急に話を持ちかけられていた〉で示される事態は、〈…取りかかることにした〉のRTを基準にしなが、そこからさらに前の時間であることが明らかになる。

もし、〈実は奈良健康ランドからの帰り道の車中〉の部分がなかったら、どうであろう。たとえばその場合でも、〈話を持ちかけられていた〉の「テイタ」が過去の経験を示すので、ETはRTより前に配置され、前文の〈取りかかることにした〉より前の時間に起こった事態だと解釈可能になる。

さらに次の(9)も見てみよう。

(9) …なぜか堀田は怒ったような顔で、子供たちを睨んでいた。

九月二十二日の、早朝の出来事だった。(中略)

挙げ句の果てに生徒指導室に呼び出され、校則書き写し十回を命ぜられた。

「だからだったのか」

おれは思わず声を漏らした。堀田は重い表情のまま池を見つめていた。

この一件で完全に頭にきた堀田は、おれを無視するように生徒に呼びかけた。(中略)

「一すまなかった」

すべての話を聞き終えたとき、おれは深々と頭を下げた。

(『鹿男あをによし』: 342-346)

上記の例では、〈九月二十二日〉から現在までのいきさつが回顧されており、前段落の〈…を睨んでいた〉よりさらに以前の事態が表されている。

そして、〈「だからだったのか」おれは思わず声を漏らした〉で、再び主人公たちが話をしている時間に戻ってくる⁸。

〈…生徒に呼びかけた〉でまた回顧に戻り、話されている事態は物語の主軸の時間より前になる。そして、〈「一すまなかった」…頭を下げた〉で、再び元のRTへ戻ってくる⁹。

〈九月二十二日〉という時の副詞があることによって、具体的な時間が設定されるので、物語の主軸の時間と、さらにそれより以前の時間(=九月二十二日)の事態を理解しやすくなっている。

このように、(7)と同様に(9)も時の副詞によって、問題のETが前文で表されているETよ

⁷ 段落や章立てが場面ごとのまとまりを表すという小説技巧上の形式は、本論では問題にしない。

⁸ 〈声を漏らした〉は、事態の終点に焦点があたるので、正確には〈睨んでいた〉時間より、さらに物語の時間は進行している。

⁹ ここでも〈頭を下げた〉は、事態の始点に意味の焦点が集まり、回想の前の〈声を漏らした〉という事態より物語の時間はさらに先に進んでいる。

り、前であることを示している。

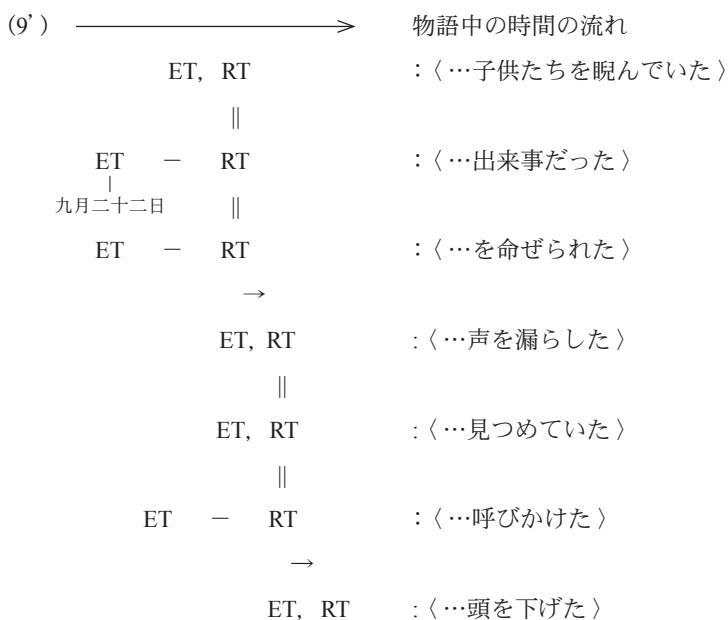
しかし、「だからだったのか」…池を見つめていた)の部分は、どうだろう。この部分には、時の副詞がない。この部分は物語の主軸の時間で、「九月二十二日」ではない。

ここでも、空間または場面の対比が物語の時間と関係しているようである。(8)と同様に場面の対比が、時間の前後関係の対比と繋がっていると考えれば、次のようにうまく分析できる。

〈おれは思わず声を漏らした〉は回想に対する主人公の反応であり、「九月二十二日」の事態に対して異なる空間、そして時間になる。

さらに次の〈…池を見つめていた〉で示されているのは、回想に入る前の〈…子供たちを睨んでいた〉場所であり、主人公たちが話し合っている物語の主軸の時間でもある。この描写があることで、物語の時間構成がより明確になっている。

(9)の時間構造は以下ようになる。



3.2. 歴史的現在

一般的に英語の物語中の歴史的現在は、過去形に挟まれ、過去→歴史的現在→過去という構成になることが多い¹⁰。つまり、物語の時間の流れの中に、歴史的現在で表される部分のRTも組み込まれており、そのRTを基準にしてETも構成されているので、その部分だけが物語の時間の流れを逸脱しているとは、考えにくい¹¹。

¹⁰ 藤原 (1999) 参照。

¹¹ 地形や町の情報を描写するために、ガイドブックのように現在形を用いる場合もあるが、そのような現在形は本論では、歴史的現在用法として扱わない。

それでは、次の例を見てみよう。

- (10) *I have never seen anything like it: two little discs of glass suspended in front of his eyes in loops of wire. Is he blind? I could understand it if he wanted to hide blind eyes. But he is not blind. ...*

(*Waiting for the Barbarians*: 1)

(10) は Coetzee (1980) からの引用で、物語全体が（歴史的）現在形で表現されている。そして上記の例は、物語の冒頭、まさに最初の書き出し部分に完了形が用いられ、問題の事態の ET が物語の現在より前のことだと示している。

現在時制により、ST と RT が同時となり、完了相 *have-en* によって、RT より前に事態が生じたことが表現されている。

英語では歴史的現在でも、時の副詞がなくとも、物語の冒頭からいきなり完了相で始められるということは、前文の RT を基準に時間が構成されているのではなく、ST を基準にして、時制形式から RT の位置を決め、そしてそれを基準に ET の位置を組み立てているといえる。

ちなみに日本語訳は以下のとおり。

- (10') あんなのはそれまでみたことがなかった。やつの両目のまえに、二つの小さな丸いガラスが針金の輪にはまってぶらさがっていた。あいつ、目が見えないのか？ 見えない目を隠そうと思ったから、というのならわかる。
(『夷狄を待ちながら』: 7)

(10') には、〈*I have never seen anything like it*〉の完了相に当たる部分に〈それまで〉という副詞が加わっている。それによって、問題の ET は RT より以前のことだとわかる。

しかし、そのような副詞がなくとも、〈ことがなかった〉が過去の経験を表すので、ET は RT からさらに過去に起こった事態だと言うことが理解できる。ただ、英語のような完了相を表す特別な文法形式を持たない日本語の場合は、具体的に時間を明示された方が、より物語の時間が理解しやすいといえる。

歴史的現在に注目して、もう一度、(8) を見てみよう。(11) として以下に再度示す。

- (11) 一つの問題が解決して、非常に心が晴れ晴れしている。飛火野の空が大きいように、俺の心にも久しぶりに雲間から陽が射している。おれは缶コーヒーの蓋を開け、さっそく次の問題に取りかかることにした。

実は奈良健康ランドからの帰り道の車中、おれはリチャードから剣道部の顧問になってくれないかと急に話をもちかけられていた。

リチャードの話はこうである。… (中略)

缶コーヒーをぐいと飲み干した。飛野火の空を、雀の群れが忙しげに横切っていく。…

(『鹿男あをによし』: 101-102)

一般的に物語中の時間構成は、前文のRTと問題の事態のETとの関係が重要視されるので、STの位置はあまり意識されない。しかし、上記のような歴史的現在形で「ル」形式が使われることより、普段は意識されず、隠れていたSTの位置(=本論で扱う例は全て一人称の物語なので、主人公のST)が明らかになる。つまりSTとRT、ETが同時になる。

さらに「テイル」の進行相の意味により、問題の事態のETはSTとRTとともに同時となり、内部から事態を見ているかの印象を与えることができる。よって、(11)の〈…晴れ晴れしている〉や〈…陽が射している〉のように、登場人物の内面を描くのに適している。

それに対し、〈…こうである〉や〈…横切っていく〉は「ル」形の現在時制により、STの位置が明確になるが(RTと同時)、進行相のような問題の事態に主人公が積極的に入り込んで、内面から描くという含意はない。(11)でも登場人物の内面ではなく、事実や外の世界の風景が描写されている。

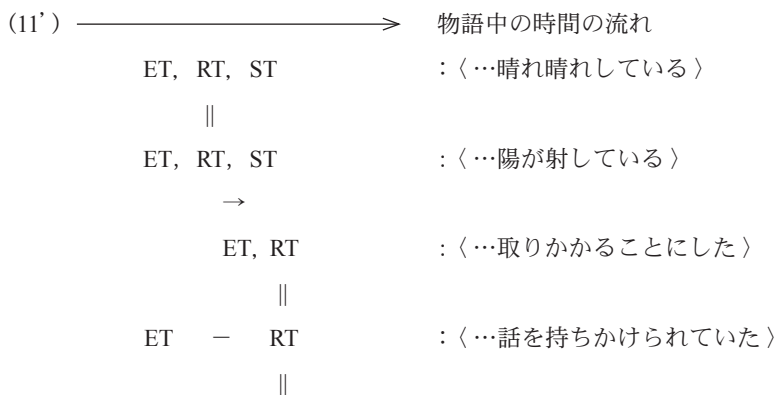
前節の過去完了も併せて分析してみると、この(11=(8))の時間構造は次のようになる。〈…晴れ晴れしている〉と〈…陽が射している〉は、前文から続いている物語の時間の主軸となるRTと同時で、かつ(歴史的)現在形によりSTもそれと同時。

そして、〈…取りかかることにした〉で事態の開始点が明らかになるので、さらに前文より物語が前進している。しかしまた、〈…話を持ちかけられていた〉で過去の経験の含意から、前文のRTを基準にして、問題のETは前文よりさらに過去へ配置される。

次の〈…話はこうである〉は〈…話を持ちかけられていた〉の具体的な内容なので、そのRTと同時。そして、〈…飲み干した〉で表されるETは物語の主軸の時間、つまり、〈…取りかかることにした〉と同じ時間へと戻ってくる¹²。

最後の〈…横切っていく〉は(歴史的)現在形により、前文のRTとST、ETともに同時となる。

以上の分析は、以下の(11')のように表せる。



¹² 正確に言うと、〈…飲み干した〉のRTは同時ではなく、事態の終点が明らかになるので、RTは前進し、物語の時間をさらに進めている。

ET, RT, ST : 〈…話はこうである〉
 →
 ET, RT : 〈…飲み干した〉
 ||
 ET, RT, ST : 〈…横切っていく〉

4. 結論

以上、本論では認知意味論の枠組から、場面・空間の移動が時間の進行と関係していること、英語と日本語の物語中の過去完了形と歴史的現在の分析から、それぞれの時制、時間構造について論じてきた。

空間の移動は、人間の認知能力を媒介にして、時間の進行にも関係しており、物語全体の場面・空間の移動も考慮しなければ、物語の時間の流れは理解できないことを明らかにした。

物語中の過去完了そして、歴史的現在の分析から、STを中心に時間関係が決まる絶対時制と言える。STの位置があまり前面に出でこず、前文のRTを基準にして時間が進む物語の中であっても、STが基準となっているようである。

一方、日本語の場合は、時制のみを表す文法形式はなく、「ル」や「タ」に完了相が含まれているので、STを基準にした絶対時制ではなく、RTを基準にETを決定する相対的な時制といえる。

参考文献

- 青木三郎 & 竹沢幸一編 (2000) 『空間表現と文法』 ころしお出版。
- Dry, Helen Aristra (1981) "Sentence aspect and the movement of narrative time", *Text* 3, pp.233-240.
- Dry, Helen Aristra (1983) "The Movement of Narrative Time", *Journal of Literary Semantics* 12, pp.19-53.
- Ehrlich, Susan (1987) "Aspect, foregrounding and point of view", *Text* 7, pp.363-376.
- Ehrlich, Susan (1990) "Referential Linking and the Interpretation of Tense", *Journal of Pragmatics* 14, pp.57-75.
- Fujiwara, Masamichi (1995) "On the Temporal Structure of Historical Present", 『筑波英語教育』 16号, pp.83-96.
- 藤原正道 (1999) 「時間の進行と日本語と英語の歴史的現在について」 『実践女子大学文学部紀要』 第41集, pp.61-72.
- 藤原正道 (2004) 「When節と物語の時間の進行について」 『実践女子短期大学紀要』 第25号, pp.7-18.
- 藤原正道 (2007a) 「歴史的現在中の when節と物語の時間の進行」 『英語と文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』 pp.219-230.
- 藤原正道 (2007b) 「歴史的現在中の「とき」節と「と」節について」 『実践短期大学紀要』 28号, pp.15-23.
- 堀田知子 (2005) 「「語り」と過去時制」 『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』 pp.33-50.
- Hopper, Paul J. (ed.) (1982) *Tense and Aspect: Between Semantics & Pragmatics*, John Benjamins Publishing Company.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房。

- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*, Univ. of Chicago press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- 溝越彰他 (編) (2007) 『英語と文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』 開拓社.
- 成田義光 & 長谷川存古 (編) (2005) 『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』 英宝社.
- 大橋一人 (2007) 「事態の焦点化と時間認知構造」『英語と文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』 pp.76 - 88.
- 砂川有里子 (2000) 「空間から時間のメタファー：日本語の動詞と名詞の文法化」『空間表現と文法』 pp.105 - 142.
- 坪本篤朗他 (編) (2009) 『「内」と「外」の言語学』 開拓社.
- Wallace, Stephen (1982) “Figure and Ground: The Interrelationships of Linguistic Categories”, *Tense and Aspect: Between Semantics & Pragmatics*, pp.201 - 223.
- 山岡實 (2001) 『「語り」の記号論：日英比較物語文分析』 松柏社.
- 和田尚明 (2009) 「「内」の視点・「外」の視点と時制現象：日英語対照研究」『「内」と「外」の言語学』 pp.249 - 295.

引用文献

- Chandler, Raymond and Parker, Robert B. (1990) *Poodle Springs*, Futura.
- Coetzee, John Maxwell (1980) *Waiting for the Barbarians*, Penguin Books. (土岐恒二訳 (2003) 『夷狄を待ちながら』 集英社文庫).
- Parker, Robert B. (1976) *Promised Land*, Dell. (菊池光訳 (1978) 『約束の地』 早川書房).
- 万城目学 (2010) 『鹿男あをによし』 幻冬舎文庫.